

院外茶話

vol.87 平成24年8月1日

埃にまみれた家具
各種のカードや会員券
押入れの中身
本当はどれもなくていい

ゆく河の流れは

母は90才を過ぎて何度かぼやを出しかけ、ついに老人ホームに入所をした。ホームは以前から目星をつけていたようで、一旦決めると手際が良く、わずかな荷物をまとめて、行ってしまった。

「もったいない」と「まだ使える」が口癖で、あらゆるものを貯め込んだけれど、そのほとんどがごみになった。それは使い古しの家具やふとんの他に、大量の端切れや、懸賞で当たったコーヒーカップのセット。何かの記念品だった腕時計など。この時計は1度も使わないうちに動かなくなった。

必要なものをより分けて、せっせとごみ袋につめていたら、1回に回収してくれるのは4袋までとのこと。全てのごみを処分するのに何日かかったことか。



1回に4袋まで回収してくれます。

父の写真や医師免許証もこの中であって、もはや必要なものではないが、まだ我が家に置いてある。

老人ホームを訪れると、母は半地下のような部屋にいて、立ち上がると視線と同じくらいの高さに表の地面があった。この部屋も嫌ではないけれど、じきに二階で日当たりのよいところが空くから、そちらに移ると言った。

聞き流せばよいことだが、老人ホームの部屋が空くということは、相応のことが起きることを意味する。一生に一度の大事件であるはずの人の死も、ここでは日常の出来事として受け取られていた。

母に与えられた部屋は、ホテルのシングルルームに毛の生えた程度で、ここにベッドとテレビと、窓際に小さな椅子が置いてある。奥にはタンスと棚があって、身の周りのものは全てここに収めなければならない。

わずかな荷物だけど、90才を過ぎてもしっかりと整理をして、忘れずに使いきることができるものは、この程度なのだろう。



70年も昔の足踏みミシンです。

中でも目を引いたのは、陽当たりのよい場所を占領した足踏み式のミシンで、70年前の嫁入り道具だった。狭い部屋には不似合いな機械だが、これだけは手放せないといいました。

こうして極めて、スリムな暮らしが始まった。頻繁に使う便せんや、裁縫箱が目につくところであって、大量の物に囲まれて暮らした頃よりも、こころなしか生き生きとしたように見えた。

そんな母の暮らしぶりを見て自宅に帰り、改めて自分の部屋を見渡せば、母が残っていたゴミと、同じようなガラクタばかり。

いずれ読もうと思って残してあった本。瘦せたら履くつもりだった細身のパンツ。コンセントを抜いたままのオーディオセットなど。

読みたくて買ったはずの本だったが、今となっては読もうと思った理由が思い出せない。細身のパンツには対になった上着があったが、こちらの方は着古してしまった。

こういう物を処分するのは、一時のストレスだけど、持っていればいつか、使わなければならない。それがもし高価なものであれば、紛失や破損の不安が重なって、事態はさらに悪化をする。

いつか使うという、その「いつか」は年々残り少なくなるし、いっそ整理をした方が、よほど気が楽になるかもしれない。

そんな簡素な生活スタイルは、世の中の流行のようで、書店にいけば超整理術だとか、断舍離といったタイトルの本が、平積みになって並ぶ。これをぺらぺら捲っていると、整理整頓をするための金言がずらり。

「3年使わなかったものは一生使わない」

「まだ使えるものと、使うものは全く別のもの」

忠告通りにいらぬものを、捨てるだけなら簡単だけど、困るのは他の人なら使うかもしれないという代物。しかし、これを使ってくれる人を探すのは難しい。

それでも部屋の荷物を少しずつ減らして、次は各種の契約やカードの整理に取り掛かった。漫然と持っていた銀行口座は解約をした。テレビはあまり見ないので、衛星放送の契約もやめた。

ポイントカードの多くは、ポイントが貯まる前に有効期限が切れることがわかって、これも捨てた。ただ、診察券だけは増えてゆく。

こうして、買っては捨てるイタチゴッコにけりを付けるためには、物を増やさなければいい。欲しいと思った物でも、2か月ほど、買わずに待っていると、たいがいは「いらぬもの」に変わっていくこともわかってきた。

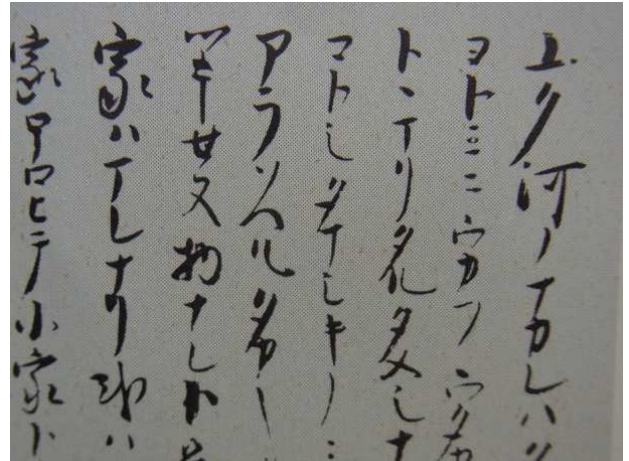
小遣いは消耗品とサービスに使って、物を持って帰ることをやめた。できる限り。

こういう発想は大昔からあって、方丈記を表した鴨長明の暮らし振りは、その極めつけで

あった。現在の下鴨神社の次男に生まれながら50歳で出家をして、最後に住んだ家はこう記されている。

「広さはわずかに方丈、高さは九尺が内なり」

1丈は約3メートルだから、およそ9平米の小さな家は組立式で、プレハブのような建物。随時好きな場所に移動ができて、晩年は主に日野山で余生を過ごした。



方丈記の一節。ゆく河の流れは・・・。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは・・・」

あまりに有名な書き出しに続いて、記されている内容は、次々と都に起こった大火、辻風、遷都、飢餓、地震など。

昨日まであった大きな屋敷や宝物が灰になって、あちこちに屍が並び、運良く生き延びた人も、身一つで路頭に迷う。

屋敷や宝物にこだわっても、それはたちまち失われる。それが嫌なら、もともと何も持たなければよい。物へのこだわりからも解放されて自由になる。それが方丈の家で暮らした理由ではないか。

千年近くも昔の都と、鴨長明の暮らしだけでも、ここ数年を振り返って見れば、似たような世相が見える。

リーマンショックで経済は大きな打撃を受け、地方の不動産やゴルフの会員権は、想像を越える値崩れをした。地震と津波で、数万人が命を落とした。続いて起きた原発の事故で、人々は資産を残して故郷を去った。

こんな世相だから、人は余分なものを持つとうとしない。持つと、かえって負担になる。だから整理整頓の本が売れる。

実際に方丈の家というわけにはいかないけど、自分も少し母の暮らしに、近づいてみようと思う。